



国際化の最前線から



ガラスの茶室のある風景

タイムアウト東京株式会社代表取締役
(クレアプロモーションアドバイザー)

伏谷 博之

京都は東山の頂にある将軍塚青龍殿の大舞台に吉岡徳仁氏のデザインしたガラスの茶室『光庵』がある。タイムアウト東京マガジンの『日本でしかできない50のこと』特集で表紙となった場所だ。日本の木造建築の粋を集めた青龍殿を背に、全面ガラス張りの光庵が佇むさまは、はるか未来の彼方から時空を超えて



タイムアウト東京マガジン7号(表紙)
Art direction : Steve Nakamura,
Photography : Shunya Arai,
Lady's Styling : Kumiko Iijima,
Dress and coat : Issey Miyake

小さな宇宙船が飛来したかのような印象を受ける。茶室には、茶の道具を前に座す徳岡氏本人と艶やかなブルーのイッセイ・ミヤケのビンテージに身を包んだ女性が配され、茶のもてなしの様子を写し出しているが、他方、これが、特定の時代や場所を感じさせないサイエンス・フィクションの一場面のような印象を強めてもいる。

外国人の目に映る日本の魅力は、さまざまだ。歴史ある伝統文化に魅力を感じる者もいれば、カワイイやおたくカルチャー、あるいは最先端のテクノロジーなど新しい文化に魅了される者もいる。世界に誇る大都市、東京こそがお気に入りという者がいれば、地方に残る豊かな自然こそが日本の魅力だと言う者もいる。このように、一見掘り所のない、一言で表現できない日本の魅力ではあるが、少し視点を変えれば、この小さな島国の中に、これだけの多種多様な文化が世代や場所を超えて息づいていることこそが、海外からみた時の日本のユニークな魅力なのであろう。

タイムアウトテルアビブの発行人が東京を初めて訪れた時、彼は、「妖精の街」と言った。「西洋とも東洋とも違う独自の発展を遂げたほかにないところ」だと。明

治の初めに来日したバジル・ホール・チェンバレンをはじめとする外国人たちもこれに似た印象を書き残しているが、近代化の緒についたばかりの時代と現在では、単に異国情緒という言葉では片付けられない何かが、日本の新たな魅力として加味されているに違いない。

日々の生活を営む場所の魅力を伝えるのは、意外と難しい。あまり自己PRが得意でなく、場合によっては、自ら強くアピールすることはみっともないことだと考える日本人にはなかなか荷が重い。しかし、日本は、文化や伝統の継承に際しても、外から新しい文化や技術を取り入れるのに際しても、適時適切な取捨選択を行い、日本らしさを失うことなく、最適化を図ってきた。少なくとも外国人の目には、そのような進化を遂げた国として見えているのではないか。

日本人の持つ天性の「編集力」と言ってよいかはわからないが、この能力が日本の個性豊かな魅力を作り上げてきたとしたら、私たちは今一度、それを認識し、活用するべきであろう。ガラスの茶室『光庵』のある風景は、その道標のように思えてならない。



タイムアウト東京マガジン7号(中表紙)
Art direction : Steve Nakamura,
Photography : Shunya Arai

プロフィール

伏谷博之(ふしたに ひろゆき)

タイムアウト東京 代表取締役

- ・1966年島根県生まれ。91年関西外国語大卒。
- ・大学在学中にタワーレコード入社、2005年、社長に就任。同年、ナップスタージャパンを設立し、社長を兼務、日本初の音楽サブスクリプションサービスを開発。
- ・09年タイムアウト東京を設立し、代表に就任。